

佳作

エネルギー・ブロック

秋田県大仙市立西仙北中学校

3年 伊藤 大翔

私のエネルギーはブロックです。私のエネルギーがブロックである理由は、幼い頃に母が買ってくれたブロックから始まりました。

小学2年生の頃私の休日は「退屈」という一色で塗りつぶされていました。理由は田舎のため友人の家と距離があり、一緒に遊んだり自分の家に招待したりすることができなかったからです。また、この頃は弟が生まれたばかりで親とふれ合えず寂しい思いをしていました。その様子を見ていた母が私のためにブロックを買ってくれました。ブロックを使い自分の気持ちを表現したり、一つの作品を作り上げたりしたとき私は心を奪われ現在に至ります。

私はブロックを使いいろいろなものを表現してきました。そして、表現の仕方を変化させていきました。始めた頃の頃はブロックを積み上げた程度のものでしたが成長し歳を重ねるごとに作品は進化を続け、現在では立派なものや、関節部や細かいパーツなどを使用したものになりました。使用したブロックの数も当時に比べて大きなものが小さくなり圧倒的に増加しました。ブロックの数が増えたものの私はまだまだ満足することができず、関節パーツや細かいパーツなどの数をさらに増やして人型の作品を作りたいと考えました。そのため、私は人間の体の仕組みについて勉強しました。完成度の高い作品を作るために表面だけではなく内部の細かい箇所まで再現してみたいと考えました。その結果、私はとても完成度の高い作品を作成し、この作品のため学んだ人体の仕組みについて知識を得ることができました。特にこだわった所は、人間の可動域についての知識を基に作ったことです。

私は一つの疑問を持ちました、学んだ知識を他の場面でも活用することができるのではないだろうか。私は考えを巡らせ両親や特に介護職員の母に相談し、一つの結論を出しました。ブロックで培った技術と、作品のために得た知識を掛け合わせることで多くの人々の役に立つことができるのではないかとということです。

具体的にどんな人々に役立つかという、生まれつき、または不慮の事故などによって体に障害のある人や体が不自由であったり、麻痺のある人たちのためのものであったりと考えます。母や友人に聞いた事例によると、足を不慮の事故で失い車いす生活だった人が、義足を使い今まで誰かの助けがないとできなかったことができるようになり喜ばれていたことや、手が麻痺状態だった人

は、リハビリ機能がついている機械を利用してスムーズに指先の状態が回復し、その手が完全に元に戻り喜ばれていたことが挙げられます。また、私の周りには体に障害のある人に対して「かわいそう」や、「気の毒だ」という考えの人がたくさんいます。私はこの考えを差別に近いものと考えます。理由は、「かわいそう」のような感情は体が不自由・体が麻痺していることから普通の人ではないという勝手な解釈から生まれるものだと考えているからです。しかし義足や義手、リハビリ用の機械を使うことで一人の人間としての尊厳が守られることや、自信につながるのではないのでしょうか。私は努力して手に入れた技術と知識を用い、将来一人でも多くの人々に役立ちたいと考えます。

自分が趣味で続けてきたことがいつか誰かのため、多くの人々のためになると考えると続けてきて良かったという達成感、将来一人でも多く人を助けたいという希望を持ったことでブロックという友人は自信につなげてくれました。私はブロックに回路を組みプログラミング技術を習得し、自動で動かしたり、人の手足を型取り実際に作ったりした新技術や、新しい視点を取り入れたいと思っています。試行錯誤をくり返し、自分なりの作品を生み出したいと考えます。

私が今現在行っていることが正しいと思いたいし、自信をつけたいと思っています。そんな私の自信をくれたエネルギーのブロックは私に作品を作り出す喜び・達成感を教えてくれた恩師のような存在であり、無限の可能性を引き出すことができる夢の宝箱のような存在です。だから、ブロックは私にとってエネルギーであったり、目標であったりするものになりました。

高齢化社会へのめまぐるしい加速により、医療現場や介護現場での人手不足が考えられます。これらのことを考えるといずれ今以上の技術が必要になるかもしれません。私にブロックが自信をくれたように、私が誰かの自信になれるような作品を作り続ければ、いつか誰かのエネルギーになってくれれば題名である『エネルギー・ブロック』が完成するかもしれません。